

2026年2/26-2/28日にかけて、サンディエゴで行われたCRE2026に参加し、招待講演並びにポスター発表を行った。本会議は今回で2回目の開催であり、分子動力学シミュレーションでノーベル賞に輝いたArieh Warsheを始めとする反応・物性分野で著名な研究者を招いて開催される、小規模ながらレベルの高い学会である。

私はアメリカでの招待講演は初めてであり、原油高にびくびく怯えながら参加したが、先方が宿泊費を全額負担してくださること、また、中谷医工計測財団からの渡航助成を得たことにより、金銭面では恵まれた条件で出席できたことは幸運であった。

学会でまず驚いたのは、参加者の熱気である。世界トップレベルのアメリカの学会とはいえ、小規模であれば日本の学会と同程度であろうとある種タカをくくっていたのだが、その予想は初日からいい意味で裏切られることになった。第一にホテルの中程度の部屋に100名程度の参加者が集まっており、参加者間の距離が物理的に近い。そのため自然と発表の合間に自己紹介やディスカッションが始まる。トークのレベルの高さも相まって非常に生産的な時間であった。一日目にはポスターセッションも行われたが、インド・イギリスを始めとして世界各国からの参加者が狭い廊下に密集し、白熱した議論が行われた(右図。中央の説明者が筆者)。その後ポスター賞の審査が行われ、私はChemCatChem/Advanced Chemical Engineering Awardを受賞することが出来た。



第二に、会場参加者の集中力である。2日目は日程がのび最終セッションは8時間にも及んだが(当然セッションチェアも8時間

連続で座長をしており、セッション終了時にはハードワークをたたえられていた)、会場から質問が途切れることはなかった。当然私も質問を繰り返し「あなたは本当にこの学会をエンジョイしている」と参加者から言われるようになったが、内心はへとへとであった。参加者の3割程度はこのセッションが終わった後もホテルのラウンジでワインを楽しみながらディスカッションを続けており、サイエンスにおけるタフネスの違いを実感することとなった。

次に注目すべきは、企業の方が相当数来ていたことである。私は会場で蝶々型金ナノ粒子を用いた液液相分離反応場の制御について発表を行ったが、発表後直ちにアメリカのベンチャー企業のCEOが駆け寄ってきて、製薬企業側のニーズを教えてくださいと出来た(さすがに金ではなく鉄でも出来ないかと言われて即答は出来なかった

が...) そのほかにも情報収集のため企業から参加されている方が多く、どうやら学会発表のリストを眺めて(例えば英国王立化学会などはそうしたリストを準備している)スケジュールのあう学会にとりあえず参加する機会が多いようである。フットワーク軽くコラボレーターを探すにはそうした手段もあるのかと感心した。

最後に、この報告書を見る日本人に向けて、小規模の学会に参加する隠れたメリットについても述べる。学会によっては、ジャーナル出版社と提携している場合が相当するあり、Special Collection 等の形で論文を発表できる場合が多い。本学会も Willy 社・Springer 社と提携しており、APC の免除や希望者への Special Collection での論文発表機会等が与えられる。日本ではあまり知られていないが、こうした商業出版社とコラボレーションした中小規模の国際学会は数多く、例えば Small(Willy 社), Carbon(Elsevier 社)といった分野トップのジャーナルですらこうした出版機会を提供している。エディターやレビュアー候補になりうる研究者と密に議論した上で投稿できることは大きなメリットである。このように国際的なネットワークと学術出版を結びつけているのである。日本国の研究への注目度合いが世界的に少なくなっていると言うデータが近年多いが、その背景にはこうした学会への参加・ジャーナルやコミュニティとの繋がりを軽視し、格の高そうな大きな国際学会にしか知らない/出ない風潮があるのではないだろうか。サイエンスは人との繋がりやそれに基づく議論に従って発展するものである。中谷医工計測財団を始めとする渡航助成を存分に使い、日本から国際的なネットワークに飛び込む研究者が続出することを期待します。